文化論集第9号
1996年9月

ハインリヒ・フォン・クライスト『ヘルマンの戦い』

猪股正廣

I

いささか前の話だが，1994年の5月に東大駒場で開催された日本独文学会春期研究発表会において，現在最も注目されている旧東独出身の作家の一人であるクリストフ・ハイン Christoph Hein は，『遠くて近い距離——今日のドイツ文学』Abstand, Distanz und Nähe—Literatur in Deutschland heute と題する印象的な記念講演を行い，引き続いて催されたコロキウム『今日のドイツ文学と社会』Literatur und Gesellschaft in Deutschland heute でも，日本人発表者の報告をうけて自らの見解を展開した。講演ではプルースト Marcel Proust の『失われた時を求めて』A la Recherche du Temps perdu のゲルマント夫人と詩人との遣り取りやハインリヒ・フォン・クライスト Heinrich von Kleist の『世の移ろいについての考察』Betrachtungen über den Weltlauf が引用され，作家による文学論や作品解釈ではなく，文学作品自体を読むべきことが強調されていたのに対し，コロキウムでは特に日本人発表者から東西ドイツ統合という歴史的，政治的事件と現代作家あるいはその文学作品との関係に注目した報告が続き，その後の討議でもこの作家の政治的立場にかかわるような質疑が繰り返された。壇下の会場からはたまりかねたように，作家に対してはその作品

を問うべきであり，政治思想を論ずべきではないという意見も表明されたが，私は作家を前にして行う議論そのものが羨ましくてならなかった。生きている現代作家になら，このような講演会や座談会で作品の背後にある社会思想や政治的信条について問いを発することができる。たとえ直接的な返答は得られなくても，その時の作家の反応に接することで質問者は想像力を喚起され，何らかの判断の手がかりを得るに違いない。けれども，講演で引用された過去の作家の一人であるクライストの場合には，もはやそれができないのだと。

小林秀夫は『無常ということ』の中で，「死んでしまった人間というものは大したものだ。何故，ああはっきりとしっかりとして来るんだろう。まさに人間の形をしているよ。してみると，生きている人間とは，人間になりつつある一種の動物かな」と川端康成に喋ったことを書いているが，とすれば，さしづめクライストは死後185年経った現在でも生き続けている作家である。というのも，当時の時事的なテーマに対して彼がきわめて率直に旗幟を鮮明にしたと信じられている，『ヘルマンの戦い』Die Hermannsschlacht についてすら，ひどく相反する解釈が生じており，作家の思想のある部分は依然として謎だからである。その政治的内容に関して一見係争の余地がないように見えるこの戯曲がヴァイマール共和国あるいはナチスの時代に熱狂的な歓迎を受けたことは否定すべくもないが，近年になって再び問題作として論評されることが多くなってきている。問題の所在は，主として，この作家が青年時代の啓蒙主義的なコスモポリタンを捨てて国家主義的な愛国者に変わったのかをめぐっている。ローマ帝国に対するゲルマン諸族の戦争を指導したヘルマン像にクライストは愛国者を託したのか，それとも人類の解放者を見ようとしたのか。またナポレオンの圧制からのドイツの救国と建国の方策をどの様に考えていたのか。これらの問いを念頭におきながら，この作品の成立した時代状況を次に見ていくことにしよう。

II

『ヘルマンの戦い』の原稿が1808年の12月に完成していたことは明らかである。クリスティアン・ゴットフリート・ケルナー Christian Gottfried Körner が息子のテオドール・ケルナーに宛てた同年同月19日付の手紙の中で，この作品の朗読が行われたと書いているし[1]，年が明けた1809年1月1日に，クライスト自身が原稿をウィーンのハインリヒ・ヨーゼフ・フォン・コリン Heinrich Joseph von Collin に送って上演を依頼しているからである。「可能なら，ケートヒェンよりも早くこれを舞台に載せて欲しいのです。この方が何等ましな作品というわけではありませんが，成功の確率はより高いと思われます[2]」と，クライストは新年に当て込んだ狙いを隠そうともしなかった。それほどに時局は，風雲急を告げていたのである。

当時の情勢とは即ち，1805年12月のアウステルリッツの戦いで，神聖ローマ帝国はナポレオンに惨敗を喫する。その時まで中立を保っていたプロイセンは，ハノーファーの獲得を目指してフランスとの同盟に踏み切っていた。しかし，フランスとロシアの二大勢力の間で均衡をとろうとするプロイセンの二元外交は非常に危ういものだった。翌年7月，王国への昇格を認められていたバイエルン，ヴュルテンベルク以下16の領邦がライン同盟を結成して神聖ローマ帝国から離脱し，戦時に兵員を提供することを条件としてナポレオンを保護者に戴く。8月になってナポレオンは既に仏軍に代わってプロイセン軍の進駐していたハノーファーをイギリスに返還することを約束する。そこでプロイセンは軍の動員を決定。この時プロイセン，ザクセン，ロシアの連合軍は数の上では優位に立っていた。しかし，10月のイエナ及びアウエルシュテットの戦いで，動きの遅い輜重隊を引き連れたプロイセン傭兵軍は，フランス国民軍の電撃戦に敗れる。1807年7月のティルジット条約によってエルベ川以西の領土を失い，莫大な賠償を課せられ，その支払いがフランス駐留軍のプロイセン撤収の条件

とされる。

この危機に直面して，ナポレオン支配からの解放と国家機構の近代的改革に取り組んだのがシュタイン男爵 Karl Freiherr vom und zum Stein であった。ティルジット条約の3カ月後，彼は内務大臣の要職につき，十月勅令や都市条例を発布して農民解放や行政改革を進めたが，これと前後して，シャルンホルスト，グナイゼナウ，クラウゼヴィッツらによる軍制改革も行われ，兵士に対する笞刑の廃止や徴兵制への準備が進められた。シュタインはスペインの国民蜂起を模範として，反ナポレオン戦争を構想していたが，その計画をもらした書簡が1808年8月にフランス側の手に落ち，11月にナポレオンの訓令によって国外追放となる。

この書簡は1808年9月に最初はオリジナルのフランス語のまま，後日ドイツ語に翻訳されて新聞に公表されており，クライストもそれらを読んでいたと推測される。1809年4月のコリン宛の手紙で『ヘルマンの戦い』の上演を再度求めるに際して，彼は次のように書いている。「――おそらく私達はスペインの歴史と双璧を成すものを演ずるのです。――オーストリア軍がこの地に現れてくれさえすればいいのですが！ ところで，敬愛する友よ，ヘルマンの戦いはどうなっていますか。ただ現時点のことだけを念頭においたこの作品の上演がどんなに私の心にかかっているか，容易に察していただけるでしょう。上演すると，早く書いてよこしてください。どんな条件でもかまいません。私はそれをドイツ人に贈るのですから。どうか上演されるようにしてください[(3)]」

公表されたシュタインの書簡にはこういう一節がある。「スペインの事件は非常に強い印象を与え，私達が早くから推測しておくべきだった成行きをはっきり証明しています。この事件をできるだけ用心深い方法で広めれば，かなり役にたつはずです。なぜならこれによって，陰謀と支配欲の仕打ちばかりでなく，力と勇気をもつ国民の能力が明らかにされるからです。当地ではオーストリアとの戦争は避けられないと見ています！ この戦いはヨーロッパの運命，

ひいては私たちの運命をも決することになるでしょう[4]」

シュタイン書簡とクライストの『ヘルマンの戦い』との関係については，リチャード・サミュエル Richard Samuel の著名な論考があるから，これ以上は立ち入らないが，クライストが手紙であれほど切望していた願いはどうなったかといえば，ナポレオン軍の駆逐もヘルマンの戦いの上演も彼の生前には実現しなかった。1809年の7月にヴァグラムの戦いで，頼みとしていたオーストリアがナポレオンに敗れたためである。この戯曲が出版されたのは，彼の死から10年後の1821年であり，上演の機会も長い間，おそらく1860年にブレスラウの舞台に載るまではなかった[5]。1863年には，カールスルーエでも上演されたが，いずれも反響はほとんどなく，この間わずかに歴史劇として，一部の人々に評価されるにとどまっていた。『ヘルマンの戦い』がクライストの意図した意味でアクチュアルな政治劇であったのは，したがってほんの数カ月に過ぎず，一般にはその当初から既に歴史劇であったのである。クライストの友人であった歴史家のダールマン Friedrich Christoph Dahlmann が後に，この作品には1808年当時の政治情勢が個々にわたって反映されている故に歴史的価値があると，文学史家のゲルヴィーヌス Georg Gottfried Gervinus への書簡に記し[6]，またこのゲルヴィーヌスは1842年に公刊された本の中で，「『ヘルマンの戦い』はその歴史的意味においてクライストの著作の中で最も重要なものである」と，この作品に肯定的な評価を下していた[7]。その後の受容史については本稿の最後で扱うことにして，次にこの戯曲の政治的歴史的内容に注意しながら，筋の流れを追っていきたい。

III

第1幕1場にはヘルマンはまだ登場せず，ゲルマン諸族の首長がローマをめぐって交わす対話の中から，彼らの利害の一致しないことが次第に明らかになる。冒頭で，カッテン族の首長ヴォルフがローマに征服されるゲルマニアの困

難な状況を嘆くのに続いて，別の一支族ジカンブリア族の首長トゥイスコマーは，ヒェルスカー族の首長ヘルマンの目を覚まさせるために，ローマのゲルマニア侵略のやり方を示すいくつかの手紙を読ませてやろうと語り始める。それによるとゲルマニア駐屯ローマ軍指令官のヴァールスは，フリースラントの首長と同盟しない限り，領土を保全すると約束しておきながら，次には戦争のためにやむを得ないといって兵を進駐させ，事実上彼の領土を占領してしまったというのである。

3場でトゥイスコマーが直接ヘルマンに訴えたところによると，彼はローマ軍を遠ざけておくために涙をのんでフリースラントを見捨てたのに，結局はローマに欺かれ，「自分の国は戦争のあらゆる残虐の餌食にされようとしている[(8)]」。これは，と彼はヘルマンに諫めるのだが，ズデーテンの彼方から勢力を伸ばして覇権を立てようとしている首長マルボートに対抗すると称して，ローマがヘルマンに同盟と軍団の進駐を求めてきている現下の状況と全く同じではないか。にもかかわらず，ヘルマンはマルボートに対抗するためにローマ軍を迎え入れるつもりだといい，ヴァールスが裏でマルボートに金と武器を渡し，ローマの将兵を密かに送ってヘルマンを撃ち破る戦術を授けていると聞いても一向に動揺しない。なぜならヘルマンの言葉を借りれば，「諸君の中にはあらぬ願いに誘われて味方になろうというものも見受けられ」，ゲルマン諸族の団結に信頼がおけないからである。

確かに首長達には互いに領土争いを演じる者もおり，こうした情勢でのゲルマン族はまだ，優勢な軍事力をもち，巧みな分断統治の政策にたけたローマの敵ではなかった。ヘルマンはさらに言葉を続ける。「諸君が同盟を結んでヴァールスに対峙し，泥沼の谷にいる敵を相手に森の岩山の頂に陣取ったとしても，ダーゴベルト，ゼルガー，貴君のいずれかにリッペ沿岸の領地を与えようと約束されさえすれば，いいか赤毛の妖婆アルラウネに賭けていうが，二人はローマ軍など見捨てて二匹の土蜘蛛のように互いに襲いかかることだろう」

そこでとヘルマンは共に決起するための条件を述べる。「妻子をまとめてヴェーザーの右岸に連れていき，諸君の持っている金銀の食器を溶かし，真珠や宝石は売るか担保にし，耕地は荒廃させ，家畜は屠殺し，集落は焼き払う。それができるなら味方になろう」。まさにそれらは，この戦いで守ろうとするものではないか，と反論するトゥイスコマーの言葉を遮って，「そうか，私はてっきり自由のためだと思っていた」と彼はいい放つ。

ここのヘルマンの台詞は，クライストがアウステリッツの戦いの直前に書いたとされる次の手紙を思い起こさせる。「なぜプロイセン王はすぐに，フランス軍がフランケンの軍を突破する際に，彼の身分代表者議会を召集しなかったのか？　なぜ彼らに，感動的な演説で（単なる苦痛でも王の心を動かしたであろうに）かれの立場をうちあけなかったのか？　虐待される王によってかれらが統治されようと欲するのか，欲しないかを，王がただかれら自身の名誉心に委ねたとしたら，かれらにある国民精神といったものが鼓舞されなかっただろうか？　そして，この動きが現れたなら，それは，ここではありふれた戦争が問題なのではまったくないことを，かれらに説明する機会だったのではないだろうか？　生きるか，生きないかが肝要であろう。そして，王が兵を三十万人増員できるなら，ただ名誉ある死を遂げること以外何も王には残っていないだろう。かかる増強ができただろうと君は思わないか？　王があらゆる自分の金，銀の器具を鋳造させたなら，侍従をなくしたり，自分の馬を廃止させたなら，王の家族全員が王に従ったなら，そして，この例に倣って，国民は何をなそうと欲するか，王が尋ねたなら？」（中村啓訳）(9)

目先の利害にとらわれた領主が侵略者の前に手をこまねいている有り様は，今も昔も同じとクライストはいいたかったのであろう。人々が自由の戦いに立ち上がらないのなら，クライスト＝ヘルマンは策略に訴えるしかない。

当惑する首長達を後に残して，ヘルマンは共に狩猟に興じたローマの属州総督ヴェンティディウスとの会食に向かう。書信の役割はメッセージの伝達にあ

ると理解するなら，本来ローマ皇帝の使節を意味する属州総督 Legat の職名を帯びたこのヴェンティディウスも，そのモチーフを体現した人物と考えてよかろう。彼はアウグストゥスに派遣され，さしあたりヘルマンと同盟を結ぶ使命を帯びている。マルボートを討つためと称し，ヴァールスのローマ軍団を受け入れるようにと一見外交的な圧力をかけるが，本国の真の狙いはヘルマンの領土の実質的征服であることを知っている。この使節を欺くために，ヘルマンは野牛狩りに招待し，さらに第2幕冒頭の天幕で話し合う場面ではことさらに弱気な指導者振りをもらす。そして，妻トゥスネルダを彼に近付け，手負いの野牛から彼女の危険を救った恩人に無理やり仕立てあげようとする。この文明の申し子ヴェンティディウスはヘルマンに，ドイツを支配するのはひとりのドイツ人でしかありえないと誓約するが，この嘘に乗せられたように見せかけるヘルマンも，かつてのローマ滞在中に，そのやり方を熟知した者として，毒を以て毒を制するとばかりに応ずるのである。

ヴェンティディウスはトゥスネルダと二人きりになるように仕向けられた部屋で，彼女の巻き毛の一房をひそかに切り取る。彼女はヘルマンにこのことを報告し，「もうこれ以上，あの若者の心を偽りの愛でかきたてさせないで」と訴えるが，冷徹なヘルマンはヴェンティディウスの行為を恋に焦がれた振る舞いだとは考えない。彼女の髪は，後に明らかになるように，ローマの皇后に戦利品の見本として送られるのであり，その旨を記したヴェンティディウスの手紙がヘルマンの手に落ちたとして後でさもさりげなさそうに彼女に示される（第4幕9場）。ヘルマンの知略を強調する余り，この手紙は実在せず，トゥスネルダの復讐心を燃え上がらせるために彼が捏造したものだとする論法もいくつか見られるが[10]，彼女の髪を奪う場面の直前にはヴェンティディウスがローマへの使者をしばらく待たせる場（第2幕4場）が挿入されていることからしても，その解釈は穿ちすぎであろう。ただし，目的のためにはどんな犠牲をも厭わない人物として描かれたヘルマンのマキャベリストとしての印象が，それ

ほどに強烈だという意味で，そういう考えも理解できないことはない。ヘルマンには国家理性に基づく政治的行動を前にして個人の領分は存在しないのであるが，トゥスネルダにはまだ心の中に牧歌的な別世界が聖域として残っている。彼女はそのためにヘルマンをこう非難するのである。「ローマに対する憎悪があなたを完全な盲目にしているのよ。あなたには全体が悪霊のごとく見えてしまうので，個人を倫理的に考えることができないのだわ」

ヘルマンのローマ憎悪は民族の支配関係に発するものであり，本来個々の人間に向かう感情ではない。憎悪は政治の本質であり，それが個人をも例外としない点ではなるほど彼女の非難は当たっている。しかし，彼女はヘルマンの憎悪が彼女の愛とは質的に異なることをきわめて不十分にしか理解していない故に，ヘルマンの境地からは遠く隔たっている。政治的明察者ヘルマンは一方の解放を求めるために他方を憎悪するのであり，その社会的な政治行動の外向性は彼女の牧歌的な自然という個人領域の内向性とはまったく別のものにならざるをえないのである。

第2幕にはこの他にも，使者と書信によるモチーフが登場する。このモチーフは感情や道徳の混入した男女のエピソードとしての脇役から転じて，次第にゲルマン民族の解放の戦略をめぐる国家的な政治行動としての主役へと移行するのである。ヘルマンは腹心の使者に託してマルボートの陣営に羊皮紙の巻物に書かれた手紙と二人の自分の子供と短剣を届けるのであるが，人質に差し出されたこの子供達と短剣は，その劇的効果がどんなに大きくても，しょせん通信の役割を担保する随伴者でしかない。家族が政治目的を実現するための手段となる点で，トゥスネルダに対すると同じ基本姿勢がここで明らかになる。他方，こうして全体のために個人を捨てたヘルマンの心的光景は，彼が時折もらす幻視のイメージの中にしか現れない。例えば第1幕3場に，こういう台詞がある。「一歩ずつ私は偉大な祖先の領土を失うのだ――森の中の川という川には，前もって黄金の橋を架けておき，どんな殺戮の戦場にあっても忘れずにい

よう，ヒェルスカーの国の最後の地へ向けて，どのように退却するのかということをね。マリウスもスラもなしえなかった凱旋をするのだからな――何年も先のことさ，もちろん――ヴォーダンの樫の木陰にある境界石の上で，最後の友人達と英雄の美しい死を遂げるときには」

ある種の言葉が神話的イメージを表現する政治的記号でしかないというこの構造は，根源的な演劇を再現しようとする呪術師シャーマンの役割さえ思わせる。考えてみれば，シャーマニズムも一種の通信作用といえなくもなく，あちら側の世界を現前させるこの役割において，劇作家クライストは己をヘルマンになぞらえることができたのかもしれない。

さて羊皮紙に書かれたマルボート宛の手紙の内容は，前段，中段，後段の3部分から成っており，前段はアウグストゥスとヘルマンとの間で結ばれた同盟について述べている。即ち，明日ローマの3軍団がヒェルスカーに入り，3日後にヴェーザー川に達するが，その前日にはヘルマンの軍もトイトブルクを発して，対岸でヴァールスの軍に合流する。アウグストゥスは，マルボートを共に撃破した後でヘルマンをゲルマン族の王にすると約束している。中段でヘルマンは次の提案をする。アウグストゥスがマルボートに金と武器と将兵をひそかに援助をしていることはかねて承知しており，そのやり方からして，ローマの意図がゲルマニアの両国を相次いで倒すことにあるのは明白である。自分はむしろドイツ人に服すことを選ぶ。その代わり，マルボートはドイツ人の指導者としてローマ軍を掃討する義務を負ってもらいたい。そのための作戦計画が後段である。この作戦はヘルマン自身がいっているように，きわめて単純である。ヴェーザーを越えてくるマルボートとこちらから出撃するヘルマンとでヴァールスの軍をトイトブルクの森で挟撃しようというのだ。

この手紙の内容はここではヘルマンの言葉で説明されるのだが，後に（第4幕1場）マルボートの口からもう一度繰り返される。クライストがこのように劇の主要な展開をトイトブルクにおけるマルボートとヘルマンの共同作戦の成

否に絞りこんでいるのは，ナポレオン軍に対するプロイセンとオーストリアのちぐはぐな対応という政治的現実への強烈な批判と考えていいだろう。先に引用した書簡にみられるように，スペインの国民蜂起を手本にして両国が共同作戦をとるというのが当時シュタインやクライストの抱いた切迫した願いだったのである。

第3幕ではゲリラ戦の後方攪乱に利用すべきプロパガンダの方法が実例をもって示される。プロパガンダとは広める，伝播するという意味のラテン語を語源とする政治宣伝のことであるが，民衆を扇動するための情報操作の効用がここで遺憾なく発揮されるのである。ヴァールスの軍団が行軍の途中で3つの村落を放火略奪したとの報告を聞いてヘルマンは，「7つの村落と噂を広めよ」と命ずる。産後間もない母子がローマ兵に殺され，墓穴に投げ込まれたと聞いて，「怒った父親も奴らは一緒に生き埋めにしたのだ」と広場でいい触らすよう知恵を授ける。神聖なヴォーダンの木を冒瀆したローマ兵に抗議した民衆が蹴散らされたという報告に対しては，「ローマ軍は捕えられた者達をむりやり怒れる神ゼウスにひれ伏させたのだな」と尾鰭をつける。

こうした宣伝方法は，クライストが『フランスの新聞雑誌教本』Lehrbuch der französischen Journalistik に「フランスの新聞雑誌は民衆に政府がよいと思うことを信じさせるための技術である[11]」と書いていることをそのまま具体化したものであろう。この戦略をさらに進めて，ヘルマンは腹心の兵にローマ軍の変装をさせ，村落に火を放ち，略奪するよう命じさえもしたが，こうした扇動の技術あるいは情報の操作を彼は妻のトゥスネルダにも施さずにはおかない。ヴァールスを迎えるためにトゥスネルダが髪を飾るディアデム Diadem は，かつてヘルマンがローマから土産として齎したものだった。そこには野生馬が騎手を振り落とす図柄が刻まれているが，その野生馬は技術あるいは文明を拒絶する自然状態を象徴している[12]。それがローマに対する未開のゲルマン族の意志を表示するばかりでなく，失われた牧歌を悼み憤るトゥスネルダの姿を予

言しており，しかもその矛先がいずれヘルマンにも及ぶとすれば，その効果はイロニーでなくて何であろう。

第4幕にはローマ兵に乱暴された娘を父親と従兄弟が刺し殺す場面があり，その死体をヘルマンは15に切り分けて15のゲルマンの支族に送り届けるように命令する[13]。それに託すメッセージは嘆きの父親に呼びかけるヘルマンの台詞から読み取れる。「その死体はドイツの地で，死んで土に返った者までも復讐へと呼び覚ますだろう。嵐は森をざわめかせて反乱をと叫び，海は陸地の肋骨を打ち叩いて自由をと響かせるはずだ」。この伝言が効を奏したことは終幕で明らかになる。そこでは第1幕で利害の不一致を見せていたヴォルフ，トゥイスコマー，ダーゴベルト，ゾルガーなどの首長も駆けつけ，ローマ軍撃退のための戦いに参加することを申し出るからである。しかし，その決定的な時が至るまで彼らは今はまだしも信頼できる味方ではなかった。他の首長達にも真意を打ち明けるべきでは，と配下が進言するのに対してヘルマンは，こう答えていた。「口先だけの連中だ，あれは。後生だから，家に帰らせろ。連中はドイツの解放を暗合文で伝えたり，危険な使者を互いに送りつけたりしている。送った使者はどうせローマ兵に縊り殺されるだけだ。薄暗くなると集まって，食ったり，飲んだりして，夜になると女のところで寝る」。この箇所はダールマンの証言では，当時の反ナポレオン組織であったトゥーゲントブント Tugendbund を揶揄したものだという[14]。クライストの考えでは，今も昔も「必要なのは誓いの言葉ではなく，行動」だったのである。

扇動活動は第5幕の戦闘場面の直前でも行われる。ローマの援軍として随行していたゲルマンの首長達に向かって弓で矢文が射放たれるのである。そこに書かれていた内容は，最後まで寝返らないアリスタンがヴァールスに報告する台詞から分かる。「ヘルマンは自由と祖国と復讐を掲げ，あの危険な謀反人め，我らに勇気をふるって軍に合流せよなどと呼びかけております。あなたの軍はもうおしまいで，武器をとってローマのために戦う者は誰であれ，斧の一撃で

首を胴から切り落とし，ゲルマニアの聖地に接吻させると脅しをかけているのです」

この矢文に記された標語「自由と祖国と復讐」Freiheit, Vaterland, Rache をフランス革命の「自由と平等と博愛」liberté, égalite, fraternité と比較してみると興味深い。こう並べてみると，クライストの考えでは，フランス革命の嫡子に侵略されたドイツにおいて重要なのは「平等」よりも「祖国」であり，「博愛」よりも「復讐」であるといわんばかりである。いずれの場合も「自由」が筆頭に来ているものの，他の二語との関連の中におくと，この語はそれぞれ限定を受けて差異を生ずる。ヘルマンのいう「自由」には個人よりも集団の自由のニュアンスが加わるのである。クライストがヘルマンに託したこの標語は，はたして民族的な愛国主義が普遍的な啓蒙主義に根差し発展したことの帰結なのだろうか。

「復讐」もこの「自由と祖国」との関連においては個人の感情の域にとどまらず，集団としての行動を規制する政治的倫理となる。この復讐は，クライストの他の作品，例えば『シュロッフェンシュタイン家の人々』die Familie Schroffenstein や『ペンテズィレア』Penthesilea, あるいは『ミヒャエル・コールハース』Michael Kohlhaas にも一部見られるような，人間の誤解や認識の限界によるものでは，もはやないのである。それ故ヘルマンは，善良なローマ人も悪辣なローマ人も区別しないのかとトゥスネルダに非難されて，こう答える。「なに，善良な者だと。そいつこそ最も悪辣な者だ。復讐の斧は他の誰よりも真っ先にその連中に振り下ろせ」

集落が焼き払われたとき子供の命を救い出したローマ軍の百人隊長もいたと聞くと，「そんなことをしたのなら，呪われるがいい。そいつは一瞬，私の意志にそむかせ，私を国の大事の裏切り者にするところだった。なぜそいつはトゥイスコンに火を放ったのか。人を侮る悪魔の輩は好きになれない。奴らがゲルマニアにのさばるかぎり，憎悪が私の任務であり，復讐が私の美徳なの

だ」

ローマ軍の指揮官の一人，ゼプティミウスはヘルマンの陣営で捕えられ，処刑されようとするとき，キケロの著書を引き合いに出して，捕虜の生命を尊重するよう要求し，ヘルマンの「正義の感情」に訴える。しかし，この感情こそが今やヘルマンを憎悪と復讐の仕事に駆りたてるのである。「おまえは正義の何たるかを知っていながら，忌々しい奴め，ぬけぬけとドイツにやってきて，我々を制圧したのだな。倍の大きさの棍棒でこいつを打ち殺せ」

この正義感はしかし金秤にたとえられたコールハースの正義感[15]とは違って，きわめて相対的，政治的な裁量であり，味方に対しては別の顔を見せるのである。ローマ軍に随行したゲルマンの兵士に対しては誰が攻撃するのかと尋ねられたヘルマンは，「この日にはドイツ人の手でドイツ人の血を流してはならぬ」と命じ，さらにこう述べる。「許し，忘れるのだ。和解し，抱き合い，愛し合うがよい。ローマに復讐する今となっては，あの連中は果敢，善良この上ない者達だ。行け。——私の感情を乱すな」

乱されまいとする感情は，コールハースの絶対化された正義感でもなければ，アルクメーネの感情の混乱でもない。怒濤のごとく押し寄せる激しい力は，今眠り込んで，同胞に対する博愛 fraternité, Brüderlichkeit が理性のごとく目を覚ますといいたげである。この作品において啓蒙主義は，よく指摘されるように，文明の規範に従うローマ軍の側にあるばかりではなく，蛮族の指導者ヘルマンの行動にも痕跡を残している。ヘルマンの戦いは戦場における現実の戦闘よりも，政治的戦略にその本質があり，その意味では，「戦争は政治の手段である」と論じたクラウゼヴィッツ Karl von Clausewitz の考え方に近い。ヘルマンは，マルボートへの密使の派遣や15の諸族に送った屍体のメッセージ，さらにはローマ軍に随行したゲルマン兵に射放つ矢文に至るまで，策略とプロパガンダに力を傾注しており，その結果，彼が戦場に到着する前に戦局はとうに決していたのである。

ローマ軍との戦端は矢文を読んで内応したゲルマン兵によって開かれ，密使に応じて出陣したマルボートが駆けつけるまでもなかった。残されているのは，死に場所を求めてさまようヴァールスをめぐる儀式のような戦闘だけである。戦乱の瓦礫で埋まったトイトブルクの広場には，勝利したゲルマンの首長達と並んでトゥスネルダが登場するのだが，彼女もまたヘルマンの策略の影響下にあって，恐ろしい復讐の仕事を終えていた。「私を雌熊にしたのはあの男であり，私は再びアルミニウスに値する人間になりたいのだ」と叫んでヴェンティディウスを檻に追い込み，飢えた羆の餌食にしたのである。ここでヘルマンの賞賛の声に迎えられる彼女は「惑乱して」，顔面蒼白の表情を示している。トイトブルクを灰燼にした炎がこの夫婦の間をも変質させないはずはないと見るべきであろう。

最終場では敵味方に分かれたマルボートとアリスタンが加わり，政治的演劇は山場に達し，ナポレオン戦争当時のアクチュアルな政治課題に関する言及もここに集中している。まず，ゲルマニアの支配者に誰がなるべきかについて，マルボートは臣従の礼をとろうとするヘルマンを制し，こう語って彼を推挙する。「太古の祖先の時代に，王冠はあなたの種族の栄光だったのだから，あなたの頭上にお返しすべきだ」

マルボートのこの台詞は，神聖ローマ帝国の歴史の中で盟主であったオーストリアに対してプロイセンのとるべき態度を示したものと考えられる。ズデーテンの彼方に本拠をもつらしいゲルマンの種族だからといって，マルボートをオーストリア国王に，主人公ヘルマンをクライストの出身国であるプロイセン国王になぞらえるのは，後世の一方的なプロイセン贔屓のなせるわざにちがいない。クライストが制作当時，ナポレオンに対抗できる国家としてプロイセンよりもオーストリアに期待を寄せ，どこよりもウィーンでこの劇を上演する機会を狙っていたことを考えれば，この時点で誰に主人公を擬するべきかは思い半ばに過ぎるであろう。

そもそもマルボートはタキトゥスによれば，ヘルマンとは終始敵対していた首長であり，二人が共同してローマに反旗をひるがえすことはなかったのである。『年代記』の伝えるところでは，両人はむしろローマへの対応をめぐって相互に反目し，内紛の結果マルボートは失脚してローマに逃れ，ヘルマンは近親の者に裏切られて暗殺されている[16]。その歴史記述をクライストは自分の劇で大きく変更し，二人の指導者を理想化して，ドイツの統一劇に仕立てあげたのであり，その際ヘルマンの種族ヒェルスカーの領地が歴史的にプロイセンに近かったとか，マルボートの領地がオーストリアに近かったというようなことはどうでもよかったにちがいない。

ともあれ，劇の中でヘルマンはゲルマニアの支配者にというマルボートの申し出に対して，こう答える。「そのことは司祭達がヴォーダンの神に犠牲を捧げる次の月夜の晩に，首長達の総会において決めることにしよう」。マルボートもこの首長達の総会で意見を徴することに賛成するが，それまでは統治者 Regent として軍を率いるよう彼に求める。そしてその最初の課題として，最後までローマ軍の陣営にとどまって戦ったゲルマンの首長アリスタンの処分を委ねるのである。「自由な国の支配者」である者は，誰と同盟を結ぼうと勝手なはずだと主張するアリスタンに，ヘルマンはこう答える。「わかっている，アリスタン。そういう考えは知っている。おまえは私を追いつめ，問いただすことができる。ゲルマンの国など，いつ，どこにあったのか，月世界にか，巨人の時代にか，と」

ここに代弁されている考えは，世界市民的な知識を有する階層の代表，とりわけゲーテとシラーであり，カタリーナ・モムゼン Katharina Mommsen によれば，クセーニエン Xenien に発表されたある二行詩 Distichon をクライストは槍玉にあげているのだという[17]。その詩は「ドイツ帝国」Das deutsche Reich と題されている。

ドイツ？ それはどこにあるのか？ 私はその国を見つけることができない。
学識の始まるところで，政治は終わる。

ヴァイマール古典主義の教養理念との対立を際立たせるために，さらにもうひとつ「ドイツ人の国民性」Deutsche Nationalcharakter と題された二行詩も引用されることがある。

ドイツ人達よ，国民を形成したいと望むのは無駄なこと。
その代わり，君達はもっと自由に修養して，人間となることができる。

ゲーテとシラーにとってドイツは，歴史的に存在しない非現実的な国家であって，理想化の対象とはならない。彼らの理念の国は別の所にあるからである。しかし，現実界に安住の国をもたなかったクライストは，学識と引き換えに政治を終わらせはしない。そうではなくて，歴史的なドイツを理想郷に転換するのである。教養の人ではなく，革命家であるクライスト＝ヘルマンは，即座にアリスタンの首を刎ねるよう命ぜざるをえない。そして，永遠の戦いの道筋と目標を次のように示すのである。

「ライン流域を急襲して奪回する仕事がまだ残っている。さしあたってローマ軍の一兵たりとも，ゲルマニアの神聖な土地から逃さないように。それから——ローマを目指して，我々かあるいは我々の孫達が，兄弟達よ，勇敢に進撃するのだ。なぜなら，この殺戮者達をそのままにしておいて，世界に平安が訪れるはずはないではないか。盗賊の巣窟を破壊し，その荒れ果てた瓦礫の山に黒旗がなびく他，なにもなくなるまでは」

幻視の政治家は戦いの不毛な到達点をも見逃してはいないが，この最終場に反映された現実の影をさらにはっきり識別するためには，クライストの書き残

した草稿『オーストリア救国について』Über die Rettung von Österreich に触れておかなければならない。

Ⅳ

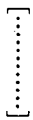
この政治的文書は，1809年7月初旬のヴァグラムの戦いでオーストリアがナポレオン軍に敗北した後，戦争の続行を意図して書かれたと推定されている。『ヘルマンの戦い』が1808年の12月に完成していたとするなら，両者の間には半年の経過があるが，先に引用したウィーンでの上演を再度督促する手紙をコリンに送付したのはついその3カ月足らず前のことである。そうした近接した執筆時期からも，この文書にはクライストが当時周囲と語らい，また『ヘルマンの戦い』に表現した政治思想が具体的，実践的に説明されていると考えてよいだろう。手書き原稿は番号を付けた8段落から成っており，そのうちのいくつかにはサブタイトルも付されている。『ヘルマンの戦い』との関連で重要なのは，冒頭の「序説」の第1段落と最後の「宣言」の第8段落であろうと思われるので，次に抄訳する。

オーストリア救国について[08]

序説

1．

大きなしかも広範にわたる危険に遭遇すれば，必ず国家は暫時，外見的には民衆制をとることになる。都市を脅かすこの大火を燃え広がるにまかせ，確かな救出活動を求めて集結した人々が警察の手に負えなくなるかもしれないという恐れから，これを阻止しないなどという考えは狂気の沙汰であろう。こういう考えは専制者ならさておき，誠実且つ有徳の統治者の心に生じるはずはない。



宣言

8.

オーストリア国王たる余，フランツ一世は，余の意志の力と神の助けによりて，ドイツの再建者また暫定統治者として，以下のごとく決意し決定する。

1) この決定の日より，ドイツ帝国は再び成立すべきこと。

2) 16才から60才までの全ドイツ人は武器を取って，フランス人を国土から放逐すべきこと。

3) 手にした武器を祖国に向けて捕わる者は，戦時裁判にかけ，死罪を申し渡すべきこと。

4) 戦争終結後，等族が召集され，帝国総議会においてきわめて合目的的な帝国憲法が制定さるべきこと。

その他

フランツ

一読しただけでは保守的，身分制的，軍国主義的思想の表明と受け取れられようが，用語については現代の視点からではなく，歴史的文脈の中でこれを考えなければならない。ヴォルフ・キトラー Wolf Kittler はこの第1段落を著書に引用して，「民衆制は，ここでは国家的事業の目的ではなく，外からの危険に対して，国民を防衛に立ち上がらせるための手段でしかない[19]」と書いたが，後の Text＋Kritik 所載の論文では，当時の「民衆制」Demokratie は現在とはかなり意味が異なることを認めている[20]。18世紀末から19世紀初頭のドイツでは一般に「民衆制」は，むしろ専制的な政治形態と理解されており，これを実現することは必ずしも進歩的とは考えられていなかったからである。この語はフランス革命の暴政のイメージもあって，当時のドイツでは否定的に使われることが多かった。ケーニヒスベルクの三頭政治 Königsberger Triumvirat の一角を成していたグナイゼナウ Neithardt Gneisenau も1826年に書簡の中で，

この民衆制を絶対制と並べて過去の愚行のひとつに数えているが[21]，カントの『永遠平和のために』Zum ewigen Frieden（1795年）にはこう書かれている。

「――この三つの国家形態のうち，言葉の元来の意味で民衆制と呼ばれる形態は，必然的に専制であるが，それは民衆制が設定する執行権の下では，全員が一人の人間を無視して，また場合によってはその人間に反してまで（つまりその人間が賛同していないのに）決議できる，したがって実は全員ではない全員が決議できるからである。このことは，一般意志が自己自身と矛盾することであり，自由と矛盾することである」（宇都宮芳明訳）[22]

民衆制と専制との結びつきはここに挙げた『オーストリアの救国について』の第1段落の文にも見られるが，この専制的な民衆制を外国支配からの解放の手段として考えたからといって，クライストが保守的，身分制的思想の持ち主だということにはなるまい。『ヘルマンの戦い』と同様にこの文書でも，あらゆることがドイツの解放という至上命令のための手段であり，民衆制もその例外ではないというだけのことである。

第8段落の「宣言」では，3）と4）が特に『ヘルマンの戦い』の最終場と密接に関連するであろう。3）は，アリスタンを処刑する根拠を示すものだが，「戦時裁判」や「死罪」の言葉は過酷に響くとしても，敵国に味方する者を厳罰に処するという考えは当時も珍しくはなかった。例えば，グナイゼナウも1808年8月の報告書の中で，次のように書いている。「部隊を我々に敵対して行軍させるドイツの君主は，君位の剝奪を宣告され，臣民はもっとその地位にふさわしい統治者を選出する。その国の大臣達が即座に我々の計画に協力しないならば，国外追放とする[23]」

4）については，クライストの草稿に書き直しの跡がある。最初に書かれ，後に線を引いて訂正された元の文は，「戦争終結後に帝国議会を開催し，帝国諸侯により，その多数票をもって，憲法を制定すべきこと[24]」となっていた。この「帝国諸侯により」von den Fürsten des Reichs は，『ヘルマンの戦い』最終

場でなされた，ゲルマニアの支配者を「首長達の総会において」In der gesamten Fürsten Rat 決定するという申し出に相応する。

解放戦争後に開催される議会が等族あるいは帝国諸侯いずれの主導権の元に国体を定めるにせよ，当時の一般的な考えとして，さらにオーストリア国王フランツ一世と署名される宣言の起草者の考えとして，この提案が保守的にすぎるといえるかどうか。諸侯の会議で戦後処理及びドイツ帝国の政体の問題を決するといういう考えがハルデンベルクやシュタインなどの改革派と共通することは，リチャード・サミュエルも指摘している。この点でクライストが保守的なら，プロイセン改革派も同様ということになる。

キトラーは，クライストが市民的リベラリスムに近づいたのは解放戦争の間だけで，「ただその死だけが，彼の友人の，アーダム・ミュラーやゲンツやフリードリヒ・シュレーゲルと似た経歴をたどるのを妨げたのだ[25]」と断定しているが，出自がユンカーであり，上記の人物達と交流があったという伝記的事実に重きをおいて，作家と作品の傾向を決定するのはもういいかげんにやめるべきではなかろうか。なるほどクライストの交際範囲は，自死した最後の年である1811年に，ユンカーの利益を代弁する徹底的な保守主義者であったルートヴィッヒ・フォン・デア・マルヴィッツ Ludwig von der Marwitz などにも及んでいたことが明らかにされているが[26]，それをいうなら同時期に例の3頭政治で最も進歩的といわれるグナイゼナウともクライストは会見して，自ら起草した政治的，軍事的論文を手渡し，就職の依頼などもしているのである[27]。彼はまたアルニム Achim von Arnim の残した記録によると，軍改革派のクラウゼヴィッツ等とともに，毎月第2火曜日に開催された「キリスト教ドイツ懇話会」Die christlich-deutsche Tischgesellschaft のメンバーでもあったが[28]，このクラウゼヴィッツは1809年頃にはシャルンホルスト Gerhard Johann David von Scharnhorst の片腕として，「ドイツ国民に働きかけて国民一揆のような形でオーストリア軍を支援する方法も研究した[29]」といわれている。当時のクライ

ストにとっては，保守か進歩かではなく，解放戦争が問題だったのであり，したがって，クライストがこの解放戦争を生きながらえていたら，という接続法の条件文に対する結果文は，永遠に謎として直説法の未知の領域にとどめておくべきであろう。それが，現代に生きる過去の作家を遇する法であると思われる。

以上見てきたように，『オーストリアの救国について』は，『ヘルマンの戦い』で文学的比喩として表現した政治的アピールを現実に引き戻し，実践したものだと考えられる。とはいえ，この文書に記されていることだけが，『ヘルマンの戦い』の政治的内容ではない。1808年前後の反ナポレオン的気運の高まりは両方から共通して読み取れるものの，戯曲の方にはクライストのそれ以前の社会観も多分に反映されている。例えば，ローマ帝国に仮託された文明への批判は，クライストのパリ時代あるいはそれ以前から培われていたものであり，それはゲルマニアの勝利の結末によって解決されるような性質の問題ではない。トゥスネルダの感情を物質的価値に置き換え，人間の尊厳を踏みにじったヴェンティディウスとヘルマンの行為に対する彼女の破滅を賭した反乱は，はたして成就したのか。作家は劇の結末において，人間の意識の解放，自由の困難さを，焼き払われたトイトブルクの荒涼とした舞台，あるいはローマの廃虚になびく黒旗のイメージの中に剝き出しのまま，現代から未来へと投げ出している。他のロマン主義者達のように，古代や中世への復帰を示唆することもない。クライストは終始現実にこだわり，まさに幻視の光景を見つめ続けたといえようか。

V

補遺：受容史

公刊後もしばらくは歴史劇でしかなかった『ヘルマンの戦い』が本格的に生き返ったのは，1870年から71年までの普仏戦争後，ドイツ帝国が実際に成立し

てからである。つまりこの作品は，この時以来その時々の政治情勢と結びつくことで見直され，現代化 aktualisieren されてきたのである。

1890年頃から，この作品は学校教育の場で愛国的教育の教材として用いられるようになった。この戯曲は予言的文学と理解され，ヘルマンの人物像にはドイツ帝国創設の立て役者ビスマルクが先取りされているといわれた。クライストはこの世紀の変わり目には決定的に国民的作家となり，その後の受容史においても，1911年のヴィルヘルム・ヘアツォーク Wilhelm Herzog[30], 1913年のマイアー・ベンファイ Meiyer=Benfey の浩瀚な研究書[31]など，民族的，愛国的色彩が強かった。1925年にはキリスト教の立場から解釈するフリードリヒ・ブライク Friedrich Braig の著作[32]なども現れるが，圧倒的な国家主義的潮流に拮抗するほどではなかった。ゲルハルト・フリッケ Gerhard Fricke はまだ1929年の本[33]では『ヘルマンの戦い』の作者クライストを一面的に愛国的であるとか，人間的であるとか断定してはいなかった。1933年にヒトラーが政権を取った第3帝国時代に，この激流がさらに勢いを増したことはいうまでもないが，この憂鬱な時代の受容史については四百もの資料を扱ったロルフ・ブッシュ Rolf Busch の労作[34]に詳しい。大まかにいえば，第1次世界対戦が終わった後のヴァイマール共和国時代には，特に『ヘルマンの戦い』によってクライストをルソー的・カント的な，啓蒙的，人間的，コスモポリタン的な理念の擁護者から，鉄血によってドイツの統一と偉大さに達することを目指す冷徹な国家主義者，現実主義者になった模範として見習うべきことが推賞され，第3帝国の時代にはヒトラーとクライストの間の類似性が論じられた。もっともこれはクライストにとどまらず，レッシング，シラー，ゲーテも「ヒトラーの戦友」としてプロパガンダに利用され，ヘルダーリン，ビューヒナーも彼の「先駆者」とされた時代だから当然ともいえよう[35]。

一方，左翼陣営におけるクライストの受容史も，1860年代までさかのぼることができる。1862年に，それまで印刷されなかったクライストの政治的文書，

『ドイツ人の宗教問答』Katechismus der Deutschen, または『この戦争では何が問題か』Was gilt es in diesem Krieg, あるいは先に紹介した『オーストリアの救国について』などが出版されると，どちらかといえば愛国的な歴史家であったトライチュケ Heinrich von Treitschke に決定的な印象を与えた。これらの文書は，「クライストが存命中，心の中では，古い党派のプロイセン士官にとどまっていたことを[36]」明らかにしているというのである。

このトライチュケの判断は，クライスト没後100年に当たる1911年に発表されたメーリング Franz Mehring の見解に継承され，その後長い間，マルクス主義的文学史におけるクライスト観の手本となった。トライチュケと同様に，メーリングもまたクライストを市民的進歩的勢力に属するとは見ずに，彼の言葉を引用すれば，「国家の専制君主よりも，革命の嫡子であるナポレオンをはるかに憎悪した，あの堕落せるロマン主義者に」数え上げた[37]。クライストはプロイセン改革者の側ではなく，旧プロイセン反動勢力の側に立っており，したがってナポレオンに対する彼の憎悪は，フランス革命に対する敵視の表現であると解したのである。ルカーチ Georg Lukács も1936年に発表した『ハインリッヒ・フォン・クライストの悲劇』[38]の中で，メーリングにならってクライストに，「市民社会に対する明確な反動的拒否」を見て取り，周知のように彼を「迷える旧プロイセンユンカー」と名づけた。しかし第2次大戦以降のマルクス主義的解釈者，例えばエアンスト・フィッシャー Ernst Fischer[39], ハンス・マイアー Hans Mayer[40], ジークフリート・シュトレラー Siegfried Streller[41], などは，ルカーチらの判断とは一線を画し，より広い視野に立ってクライストとその作品を評価している。

さてわれわれはここで，クライスト研究を特徴づける，もうひとつの大きな潮流である審美的・芸術的方向，あるいは人間的・実存的解釈についても一瞥しておかなければならない。戦前においてもヴァルター・ムシュク Walter Muschg[42] やフリートリッヒ・グンドルフ Friedrich Gundolf[43]は，『ヘルマンの

戦い』を愛国主義の作品だとは見ずに，クライスト特有の徹底した個人主義，あるいは損なわれた正義に基づく憎悪の表現と解釈していたが，絶対的感情による実存主義的クライスト解釈を代表するのは，ギュンター・ブレッカー Günter Blöcker[44]である。また審美的・芸術的方法のひとつとして文体分析があるが，これはエーミール・シュタイガー Emil Staiger[45]や作家のライナー・クンツェ Rainer Kunze[46]の解釈例にみられるように，短編や Anekdote などの小品を対象とするのには向いていても，長い戯曲作品の全体を扱うのは困難であろう。

再び『ヘルマンの戦い』の受容に限定して，近年の動向を概観してみると，1980年代以降いずれの研究も作品の政治的性格に注目しているように見受けられる。特に憎悪と人間性をめぐって，政治と作家の問題や作品成立の時代状況を考察する傾向が認められる。その中から，典型的と思われる二つの本を紹介したい。

ついでにいえば，この二つの研究は，いずれもクラウス・パイマン Claus Peymann の演出によるボッフムの舞台が公開された後に書かれている。『ヘルマンの戦い』の受容史は常に現代化の歴史であったが，同時にそれが不必要なほど現代的であったともいえ，その現代性を強烈に印象づけた1982年のパイマン演出の後になお，このような対照的な政治的方向を示す研究書が現れているのは，クライスト研究にきわめて特徴的なことだと思われる。

そのひとつの著作は1984年に発刊されたハンス・ディーター・ローゼ Hans-Dieter Loose による学位論文であり，もうひとつは，これまで屢々引用してきたヴォルフ・キトラーによる教授資格論文（1987年公刊）である。ローゼの研究『クライストのヘルマンの戦い』Kleists Hermannsschlacht[47]は文字どおり，この戯曲をテーマとしながら，クライストのパリ旅行時代の思想形成に注目し，啓蒙的人間的理想から現実の市民社会を批判する視点を見いだすのに対し，キトラーの『文学精神から誕生したパルティザン』 Die Geburt des Partisanen

aus dem Geist der Poesie[48]は，作家クライストの先祖たちの軍隊における足跡を600年もさかのぼって古文書に探ることに最初の第1章を割いており，その家系的伝統と時代的状況を広く渉猟した上で，作品に反映された解放戦争の具体的戦略を指摘している。

キトラーのこの著作で『ヘルマンの戦い』を扱った部分は，特にこの作品とシュタインとの関係を論じたリチャード・サミュエルの論文に多くを負っていると思われるが，新たな資料として，有名な『戦争論』の著者であるクラウゼヴィッツの書いたものを多く引用して，軍事的戦略の背景を補強している。しかし彼によればクライストは，軍事的にはプロイセン改革者たちと同じ考えを持っていたものの，政治的には，「明確に身分制的，反リベラル」eindeutig ständisch-antiliberal[49]であったという。しかし，軍事と政治とを分離するこのキトラーの論法は，後世の判断として正当性を欠くのではあるまいか。クラウゼヴィッツと同様にクライストにおいても，政治や経済の問題を軍事と切り離して改革に反対する態度は見られないからである。『ベルリン夕刊新聞』に掲載された6点の政治的記事のうち，3点はクライストの手になるものとされているが，そのいずれも，少なくても新聞記事として読む限り，改革派のハルデンベルクの政策に反対する主旨は感じられない。ただし，クライストの作品をできる限りイロニーとして，字義の裏を深読みするヴォルフガング・ヴィトコヴスキー Wolfgang Wittkowski のような研究者の考え[50]は，これと異なることも最後に申しそえておく。

注(1) In: Heinrich v. Kleists Lebensspuren. Dokumente und Berichte der Zeitgenossen. Hrsg. v. Helmut Sembdner. München (dtv), 1969. (Lbs. と略称) Nr. 304a. S. 229.

(2) In: Heinriich v. Kleist. Sämmtliche Werke und Briefe. Hrsg. v. Helmut Sembdner. 5. Aufl. München (Carl Hanser), 1970. 2. Bd. (KW II. と略称) S. 818.

(3) In: KW II. S. 824.

(4) Vgl. Richard Samuel: Kleists "Hermannsschlacht" und der Freiherr v. Stein. Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft 5. 1961, S. 97.

(5) この作品が1839年にピュルモントで初演されたという Sembdner の想定にはおそらく誤解がある。Vgl. Ausstellung und Katalog, Heinrich v. Kleist. Zum Gedanken an seinen 200. Geburtstag. 1977. S. 114f.

(6) In: Lbs. Nr. 319. S. 247. Dahlmann an Georg Geottfried Gervinus (Jena, 26. Okt. 1840)

(7) Wolf Kittler: Die Geburt des Partisanen aus dem Geist der Poesie. Freiburg im Breisgau, 1987. S. 12. Anmerkung 8.

(8) 以下，かぎ括弧部分は特にことわらない限り，Die Hermannsschlacht. In: Heinrich v. Kleist. Sämmtliche Werke und Briefe. Hrsg. v. Helmut Sembdner. 5. Aufl. München (Carl Hanser), 1970. 1. Bd. (KW I. と略称) S. 533-628 からの引用である。

(9) In: KW II. S. 760f. Kleist an Otto August Rühle v. Lilienstern [Königsberg, Ende Nov. 1805] 全訳 クライストの手紙 東洋出版 1979年 420頁。

(10) Vgl. Hans Heinz Holz: Macht und Ohnmacht der Sprache. Frankfurt am Main (Athnäum), 1962. S. 83. あるいは，Nobert Miller: Verstörende Bilder in Kleists Hermannsschlacht. In: KIeist Jahrbuch 1984. Hrsg. v. Hans Joachim Kreutzer. Berlin (Erich Schmidt), 1984. S. 99. あるいは，Regina Schäfer: Der gefälschte Brief. In: Kleist Jahrbuch 1993. S. 182ff.

(11) In: KW II. S. 361.

(12) Vgl. Die Fabel ohne Moral. In: KW II. S. 325.

(13) このモチーフの源泉のひとつは，聖書の士師記19, 29 に見られる。「彼は自分の家に着くと，刀を取り，自分のそばめをつかんで，その死体を12の部分に切り分けて，イスラエルの国中に送った」

(14) Vgl. Anmerkung v. Sembdner. Brief v. Dahlmann an Julian Schmidt. In: KW I. S. 944.

(15) Vgl. Michael Kohlhaas. In: KW II. S. 14.

(16) コルネリウス・タキトゥス著 国原吉之助訳『年代記』(上) 岩波文庫1981年 第2巻 131-167頁参照。

(17) Vgl. Rainer Zons: Von "der Not der Welt" zur absoluten Feindschaft. Kleists Hermannsschlacht. In: Zeitschrift für deutsche Philologie 109. 1990. S. 191.

(18) In: KW II. S. 380ff.

(19) a. a. 0. 注(7) S. 254.

(20) Vgl. Wolf Kittler: Der ewige Friede und die Staatsverfassung. In: Text＋Kritik. Sonderband. Heinrich v. Kleist. München, 1993. S. 143.

(21) ピーター・パレット著 白須英子訳『クラウゼヴィッツ――『戦争論』の誕生』中央公論 1988年 293頁参照。Letter to the Hanoverian statesman Count Münster, 14 November 1826. In: Peter Paret: Clausewitz and the state. Oxford, 1976. S. 264.

(22) 『永遠平和のために』 岩波文庫 1985年 34頁。

(23) Vgl. Richard Samuel: Heinrich v. Kleist und Neithardt v. Gneisenau. In: Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft 7. 1963. S. 97.

(24) Anmerkung v. Sembdner. In: KW II. S. 940.

(25) a. a. 0. 注(19) S. 253.

(26) Vgl. Lbs. Nr. 504. S. 353.

(27) Vgl. Heinrich v. Kleists Nachruhm. Hrsg. v. Helmut Sembdner. Nördlingen, 1977. Nr. 16. S. 12. Nr. 91. S. 87.

(28) Vgl. Lbs. Nr. 466. S. 326.

(29) a. a. 0. 注(20) ピーター・パレット，159頁参照。Vgl. Peter Paret, S. 144.

(30) Wilhelm v. Herzog: Heinrich v. Kleist. München, 1911.

(31) Heinrich Meyer-Benfey: Das Drama Heinrich v. Kleists. Göttingen, 1913.

(32) Friedrich Braig: Heinrich v. Kleist. München, 1925.

(33) Gerhard Fricke: Gefühl und Schicksal bei Heinrich v. Kleist. Berlin, 1929. Vgl. Marcus Gärtner: Kleistbilder und Kleistdeutngen in der Germanistik. In: Deutsche Klassiker im Nationalsozialismus. Hrsg. v. Claudia Albert. Stuttgart, 1994. S. 114.

(34) Rolf Busch: Imperialistische und faschistische Kleist-Rezeption 1890-1945. Frankfurt am Main, 1974.

(35) a. a. 0.注(33) S. 10.

(36) Heinrich v. Treitschke. Literar. Zentralblatt. 10. Mai 1862. In: a. a. 0.注(25) Nr. 195. S. 158.

(37) Vgl. Heinrich v. Kleist und Napoleon Bonaparte, der Furor Teutonicus und die ferne Revolution. In: Heinrich v. Kleist. Kriegsfall-Rechtsfall-Sündenfall. Hrsg. v. Gerhard Neumann. Freiburg im Breisgau, 1994. S. 36. Franz Mehring: Gesammelte Schriften. Bd. 10. Berlin, 1961. S. 320.

(38) Georg Lukács: Die Tragödie H. v. Kleists. Internationale Literatur. 7. Jg. H. 8. Moskow, 1937.

(39) Ernst Fischer: Heinrich v. Kleist. In: Sinn und Form. 13. Jg. 1961. S. 759-844.

(40) Hans Mayer: Heinrich v. Kleist. Der geschichtliche Augenblick. Pfulingen, 1962.

(41) Siegfried Streller: Des dramatische Werk Heinrich v. Kleists. Berlin, 1966.

(42) Walter Muschg: Kleist. Zürich, 1923.

(43) Friedrich Gundolf: Heinrich v. Kleist. Berlin, 1924.

(44) Günter Blöcker: Heinrich v. Kleist oder das absolut Ich. Berlin, 1960.

(45) Emil Staiger: Heinrich v. Kleist. Zum Problem des dramatischen Stils. In: Meisterwerke deutscher Sprache aus dem neunzehnten Jahrhundert. Zürich, 1963. S100-117.

(46) Rainer Kunze: Die Souveränität des Kunstwerks. Frankfurt. 1989.

(47) Hans-Dieter Loose: Kleists "Hermannsschlacht." Karlsruhe, 1984.

(48) a. a. 0.注(19)

(49) a. a. 0.注(19) S. 255.

(50) Wolfgang Wittkowski: Schrieb Kleist regierungsfreundliche Artikel? In: Literaturwissenschaftliches Jahrbuch. 23. Berlin, 1982. S. 95-116.

付記——この論考の一部，とくに最終章の補遺は，1994年10月9日に開催された日本独文学会秋期研究発表会のシンポジウム『クライストと言語——連続と断絶／夢と現実』での私の報告原稿に手を加えたものである。